



Title	反資本主義フェミニズムの連帯とジェンダー表象 : 国際開発と「第三世界」女性をめぐるメディア研究の可能性
Author(s)	近藤, 凜太郎
Citation	大阪大学教育学年報. 2025, 30, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

反資本主義フェミニズムの連帯とジェンダー表象 —国際開発と「第三世界」女性をめぐる メディア研究の可能性—

近 藤 凜太郎

要旨

本論は、国際開発に関わる諸組織（国連機関、多国籍機関、政府機関、財団、企業、NGOなど）が制作する広報媒体に着目して、そこに描かれる「第三世界」の人物表象を分析した英語圏の批判的なメディア研究の動向を整理することで、日本の国際協力の文脈における新たな研究課題を提示するものである。

寄付金広告やPR動画、ウェブサイトや活動レポートといった形態で流通する「第三世界」表象は、「第三世界」の支援対象者と「第一世界」の市民を媒介するメディアとして、しばしば人種やジェンダーをめぐるステレオタイプを組み込みながら資本主義世界経済の収奪構造を覆い隠す。批判的なメディア研究の潮流は、開発理念の変容とグローバル資本主義の浸透を念頭に置きつつ、無力な「犠牲者」的表象から明るい「ポジティブ」な表象へ、そして「女の子への投資」を呼びかけるPR戦略へと考察の対象を広げてきた。しかし、日本では、一部の例外を除き、具体的な素材をとりあげた分析作業が進展していないのが現状である。今後、反資本主義を志向するフェミニズムのトランスナショナルな連帯に向けて、ジェンダーの視点から「第三世界」表象を批判的に分析する研究の発展が期待される。

1. 問題設定：国際開発における「第三世界」ジェンダー表象

本論は、国際開発に関わる諸組織（国連機関、多国籍機関、政府機関、財団、企業、NGOなど）が制作する広報媒体に着目して、そこに描かれる「第三世界」の人物表象を分析した英語圏の批判的なメディア研究の動向を整理することで、日本の国際協力の文脈における新たな研究課題を提示するものである。

第二次大戦後の国際開発は、「第三世界」のマイノリティ集団、とりわけ生存維持やインフォーマル経済を担う女性たちに破壊的な影響を及ぼしてきた。収奪的な開発の拡大により、土地や水や森林が農民や先住民の女性から引き剥がされ、資本蓄積の手段として濫用された（Shiva 訳書 1994）。世界銀行とIMFによる構造調整政策は、公共事業の著しい劣化を招き、女性の生活状況を悪化させた（Dalla Costa & Dalla Costa eds. 訳書 1995）。日本の経済協力や開発援助も例外ではない。冷戦体制下で日本が経済大国化を遂げるなか、アジア各地の女性労働者は、輸出加工区での過酷な労働に加え、日本のODAと癒着した軍事独裁政権による組合弾圧に苦しんだ（塩沢 1986）。また、日本人男性の買春観光、インフラ建設による生活破壊、公害輸出といった問題がアジア各地の女性運動から批判を浴びた（松井 1996）。21世紀に入ると、資本主義のグローバルな浸透とともに多国籍企業の労働・資源収奪が苛烈さを増し、「第三世界」の女性たちは特に深刻な影響を受けている。「第三世界」フェミニズムの先駆として知られるチャンドラ・モハンティ（訳書 2012）によれば、グローバル資本主義の略奪的性格を「第三世界」女性の視点に立脚して批判する作業こそ、21世紀のフェミニズムがトランスナショナルな連帯を生成していくための基礎になる。そのためにもまずは、私た

ち自身が内面化してきた植民地主義的なまなざしを徹底的に省察する必要がある。

このような認識にもとづいて英語圏のメディア研究では、開発に関わる諸組織が産出する「第三世界」表象の分析が蓄積されてきた。広報活動によって流通する寄付金広告や啓発資料では、支援対象となる「第三世界」の人びとの姿が写真や映像やキャプションを介して反復的に呈示される。それは例えば、ゴミ山に通ってわずかな収入を得るスラムの少年であったり、紛争で故郷を追われて悲嘆にくれる母親と乳児であったりする。あるいは、児童婚の慣習によって教育機会を阻まれる少女であったり、井戸や学校が建設されて喜ぶ笑顔の子どもたちであったりもする。私たちの「心象地理 mental map」(Said 訳書 1986)として定着したこれらのイメージ群は、単に寄付金獲得や意識啓発のツールとなるだけではない。それは、「第三世界」の支援対象者と「第一世界」の人びとを媒介するメディアなのであり、しばしば人種やジェンダーに関するステレオタイプを組み込みながら定型的な「第三世界」像を構築する(Smith & Yanacopulos 2004)。その意味作用は、貧困や人権侵害の背景となるグローバルな収奪構造が「第一世界」自身の手で生み出されてきた歴史的事実を、人道主義の装いの下に覆い隠す。それによって、苦しみの舞台となる「第三世界」と、救いの手を差し伸べる「第一世界」との物質的・イデオロギー的権力関係を再生産するのである。日本でも、1970年代半ばに「国際協力」という行政用語が定着して以来、政策文書・体験談等の文字資料や映像・広告等の視覚表現が無数に生み出されてきた。北野収(2011)は、これら一連の表現物を通じて形成される認識の体系を「国際協力のまなざし」と呼ぶ。しかし日本では、後述する一部の例外を除けば、具体的な素材をとりあげた分析作業が十分に蓄積されてきたとはいえない。したがって本研究では、英語圏の既存研究のレビューを通じて、日本の文脈への示唆を引き出すことを試みる。

以下でとりあげるのは、寄付金広告やPR動画、ウェブサイトや活動レポートなどに登場する「第三世界」の人物表象を、人種やジェンダー等にもとづく権力関係と結びつけて読解した研究群である。なお、本論では紙幅の都合上、広報活動の意思決定をめぐる送り手研究や、寄付者や視聴者の反応を探るオーディエンス研究には触れることができない。また、マーケティング論や心理学の見地から効果的な広告デザインを探る研究もみられるが、これらは資本主義的開発を問題視する視点をもたないため、レビューの対象には含めない。以下、2節では女性や子どもを受動的客体として描く「犠牲者」的表象、3節では1980年代後半から浮上した明るい「ポジティブ」な表象、4節では2000年代後半に台頭した「女の子への投資」を呼びかけるプロモーションに関する研究群をとりあげる。そのうえで5節では、日本の国際協力の文脈で「第三世界」表象を論じた数少ない研究を検討し、今後深められるべき課題を指摘する。

2. 「犠牲者」的表象の意味作用：「幼児化」と「女性化」

英語のdevelopmentが今日的な「開発」の意味で概念化されたのは、1949年1月20日に行われたハリー・トルーマンの合州国大統領就任演説が端緒とされる(Esteve 訳書 1996)。トルーマンは、戦後の外交方針として、国際連合の支援、マーシャル・プランの継続、NATOの結成に続く4点目の政策として「低開発地域 underdeveloped areas」への経済支援を掲げたのだった。これ以降、貧困を共産主義の温床とみる冷戦的世界認識を背景に、「低開発」地域の「開発」が国際的アジェンダとして定着していく。トルーマンは、見かけ上かつての帝国主義とは異なる世界戦略を発明したのである。グスタボ・エステヴァ(訳書 1996)は、「民主的で公正な世界」を実現するプロジェクトとしての開発が帝国主義の暴虐から概念上分離された点をもって、「開発の時代 the era of development」の幕明けと表現する。「文明／野蛮」という共約不能な差異の認識に代わり、GNPやGDPなど同一尺度上の量的差異によって諸国家をランク付けする世界観は、帝国

主義の歴史と恣意的に手を切るための概念操作にほかならなかった (Rist 2010)。

「開発の時代」を彩るさまざまな表象はどんな意味作用を帯びてきたのか。それらはいかにして貧困や紛争や災害などの不条理を理解するフレームを形成し、介入を正当化してきたのか。第二次大戦終結以来、「第三世界」の救援を要請するメッセージにおいてもっとも頻繁に用いられてきたのは、総じて小さな子どもとその母親であった (Manzo 2008)。例えば、1960年代ビアフラ危機に際しては、有力な国際NGOが飢餓に苦しむ子どもの写真を広告に多数掲載して、「アフリカの子ども」イメージを定着させた (Pruce 2016)。栄養失調で腹部を膨張させた子どもの写真、痩せ細った子どもを抱きかかえる母親の写真など、無力な客体として「犠牲者」化 (victimization) された人物像は、定型的な「第三世界」像として現在でも効力を保っている。こうした表象が反復されるのは、「第三世界」の惨状と、リビングでくつろぐ「第一世界」の人びとのあいだの物理的・心理的隔絶が一種の商品価値を生むからだ。善意からくる憐みや同情は覗き見趣味的 (voyeuristic) な消費欲とも両立しうる。それゆえこれらの表象は「貧困のボルノグラフィ」とも形容される (Plewes & Stuart 2007)。その商品価値は、まなざしを保有する特権的主体自身が危機に晒されず、責任を問われることがないという無意識的な確信によって支えられる。

Lamers (2005) は、あるベルギーの国際NGOが1966年から2001年にかけて制作した広告を時系列的に分析し、もっとも多く登場するモチーフが一貫して子どもであったことを確認している。Lamersによれば、子どもは脆弱性と依存性を象徴する。子どものイメージを用いた広告群は、「第三世界」を、「第一世界」の援助なくして自立できない未熟な集団として客体化する。また同時に、子どもは無垢 (innocence) の象徴でもある。穢れなき存在、そして他者の善意に反抗しない従順な存在としての子ども像は、開発への合意を調達するうえで中心的位置を占める。

母子の表象についてはDogra (2011) が、イギリスの新聞に掲載された国際NGOの広告を事例に考察している。視覚表象を通じて強調される母子の身体的・情緒的結びつきは、聖母子像を淵源とする宗教イコンのイメージを暗に忍ばせつつ、母子の愛着を人類普遍的「自然」とする支配的価値観を喚起する。母子の結合は「自然」かつ私的な領域を象徴するがゆえに、政治的・歴史的産物としての貧困や不正義に対する構造的な理解は遠ざけられる。さらに、Dograによれば、分析対象とされた広告のなかで「第三世界」の成人男性が登場するものはごくわずか (約9%) だった。母子を扶養する (／すべきとされる) 父親の不在は、子どもと母親の脆弱性を印象づける。これにより母子像は、近代家族の下での家長制規範を土台としながら、「第一世界」が望む理想的な受益者像として機能するのである。

「第三世界」表象とジェンダーの結びつきは、難民表象の歴史にも表れる。1991年刊行のUNHCR設立40周年記念誌を分析したJohnson (2011) によれば、1950年代の難民は主に冷戦体制下の東側諸国から「民主主義」の価値に共鳴して西側に逃れてくる政治難民を意味していた。この時期の典型的な難民像は、単独もしくは家族同伴の白人男性だった。自国からの退避はヒロイックな行為とされ、個人の顔を容易に識別できる写真が多くを占めていた。ところが60年代に入ると、植民地の独立に伴って難民表象は「人口爆発」言説と結びつき、人種的に異なる集団が「大挙」して国境付近へ押し寄せるイメージに移行する。難民は統御不能な塊 (mass) として描かれ、個人の固有性は剥奪される。本国送還が基本方針とされるなか、脅威をもたらさない脆弱な難民像として前景化したのが、悲嘆にくれる母子像であった。

もちろん、被写体の客体化は「第三世界」表象に限らず、あらゆる視覚メディアに共通する根源的作用ともいえる。スーザン・ソントグ (訳書 2003) が述べるように、人は写真をみるときたい写真の衝撃性のみを記憶してしまうのであり、被写体の経験の背後にある構造的な文脈を深く理解することは稀だからだ。だが重要なのは、この客体化の作用がジェンダーの差異と結びつくことでさらに強固になるという点である。

「犠牲者」的表象は、標準家族の規範を織り込んで母子像を前景化することで「第三世界」を無力化する。同時に、誰が支援の受益者にふさわしく、誰が支援から除外されるべきかを選別し、その境界を画定する。つまり開発への合意調達は、Burman (1995) が端的に表現するように、「第三世界」の「幼児化 infantilization」と「女性化 feminization」を通じて推進される。これにより、貧困や人権侵害といった不正義に対する「第一世界」の構造的加担は忘却され、不正義の解消が先延ばしにされていくのである。

3. ポジティブな表象の台頭：エチオピア飢饉以後の変容

「犠牲者」的表象はいまでも威力を保っており、「第三世界」イメージの重要な一角を占めていることは疑いようがない。だが、過去の一時期に比べれば、今日では「犠牲者」的表象は相対的にウェイトを低下させ、新しいパターンの表象が存在感を増している。笑顔で農作業をする女性、教科書を手に携えて勉強に励む子ども、将来の夢を熱心に語る少女といった、明るいトーンの表象がそれである。第二次大戦後の「開発の時代」にこのタイプの描写が皆無だったわけではない。しかし、既存研究の共通見解によれば、顕著な変化が生じるのは80年代後半からだ。この時期を境にして徐々に、従来型の「ネガティブ」な「犠牲者」像とは一線を画す「ポジティブ」な表象が増加していき、21世紀に入る頃には新たな定型表現の一角を占めるようになる (Cameron & Haanstra 2008, Dogra 2007, Lidchi 2015, Wilson 2011, Zarzycka 2016)。

きっかけは、1984-85年にエチオピアで発生した深刻な飢饉だった。このときエチオピアでは、長期の干ばつによる食糧危機に軍事独裁政権下の紛争が重なり、約100万人が命を落とした。加藤剛 (2017) は、日本で阪神淡路大震災が起きた1995年をボランティア元年と呼ぶのになぞらえて、エチオピア飢饉が起きた1984-85年を国際的レベルでの「人道支援元年」と名づけている。特に注目されるのは、マスメディアの報道のみならず、世界的人気を誇るミュージシャンがチャリティの先頭に立ったことである。飢饉の報道に衝撃を受けたボブ・ゲルドフとミッジ・ユーロは、「かれらは今クリスマスだって知っているだろうか」を作詞・作曲し、この曲をU2のボノらによって結成されたグループ「バンド・エイド」がリリースした。翌年7月にゲルドフは、ロンドンとフィラデルフィアでチャリティコンサート「ライブ・エイド」を同時開催した。合州国では、1985年初頭にマイケル・ジャクソンとライオネル・リッチーが「ウィ・アー・ザ・ワールド」を制作し、45人のアーティストが結集して同曲を収録した。これらの出来事は、ミュージシャンや俳優、モデルやスポーツ選手などの著名人をブランドイメージとして起用するセレブリティ人道主義 (celebrity humanitarianism) の先駆けとも捉えられる (Müller 2013)。

バンド・エイドやライブ・エイドの爆発的成功と寄付金の急激な増加をうけて、イギリスの国際NGOは、広報活動の方針をめぐって反省を迫られることになる。収入増加は明らかにファンドレイジング・アピールの大量流通によるものだった。しかし、流通したイメージ群は大部分が「犠牲者」的表象にあたるものだった。無力な子どもや女性の写真が濫用され、アフリカを「暗黒大陸 dark continent」とする古典的なステレオタイプが反復された (Dogra 2007)。これにはすぐさま批判が殺到し、複雑な政治情勢が絡み合った食糧危機を自然の災厄や支援物資不足の問題として単純に切りとっている点も問題視された。広告がレイシズム的であることは誰の目にも明らかだった。NGOの関係者たちは、ステレオタイプの固定化が開発課題の解決という長期的な活動目標を裏切るものではないかという反省を深めていく (Lidchi 2015)。

ほどなくして表象の内実にも変化が表れる。ネガティブな表象は徐々に回避されるようになり、能動的で自立的な、かつ自己決定のできる個人に焦点化したポジティブな表象が台頭してきたのである (Dogra 2007, Lidchi 2015)。支援プログラムを通じて経済的自立や自己実現を遂げる人びとの笑顔が強調され、自

信に満ちた表情で夢を語り、みずからリーダーシップをとってコミュニティの意識改革に尽力する少女たちが多く登場するようになる。さらに、従来は「第三世界」の人びとを匿名の集団として均質化することが多かったが、固有名を付したパーソナル・ストーリーの形式が盛んに用いられるようになる。

こうした変容は、開発をめぐるトレンドの変化とも連動していた。開発政策史のオーソドックスな叙述(佐藤 2005)によれば、国家単位の経済成長を至上命題としてトリクル・ダウン(社会全体の生産性が増大することで貧困層にも恩恵が自然に滴り落ちてくるとする発想)に期待するアプローチへの疑問から、70年代には貧困層への直接的分配を重視するベーシック・ヒューマン・ニーズ戦略が提唱される。その後、構造調整政策の嵐が吹き荒れる80年代を経て、90年代には経済指標だけでなく栄養・教育・保健といった部門を考慮する人間開発概念が定着した。また、アマルティア・センやマーサ・ヌスバウムら著名な学者の理論を基礎に、人間の安全保障やケイパビリティといった概念が脚光を浴び、参加型開発、エンパワーメント、貧困削減、パートナーシップ、持続可能な開発など、新しい開発理念が注目を集めるようになる。ポジティブな人物像は、こうした時代状況にフィットするイメージでもあった。

しかしながら、一連の先行研究では、新しいポジティブな表象実践にも厳しい批判が向けられている。NGOによるイメージ使用のガイドラインを精査したZarzycka (2016) は、文化的特徴をスティグマ化しない、居住地を特定される情報を掲載しない、貧困や災害をセンセーショナル化しないといった(それじたいは良心的な)基準が設けられた結果、背景を捨象して文脈を抽象化した笑顔の子どもの顔写真が多用されるようになったという。これにより、「第三世界」の子どもと「第一世界」の寄付者の関係は、経済的収奪関係ではなく、情動的(affective)な同一化の関係へと偽装される。Zarzyckaによれば、子どもの笑顔は開発事業の成功を予期させる記号であって、ファンドレイジング戦略とも決して矛盾しない。

Wilson (2011) は、オックスファムのカタログを事例として、農作業や手工芸品制作に従事する笑顔の女性像に注目する。Wilsonによると、小規模な収入創出活動に励む勤勉な女性像は、今日のグローバル資本主義が要請する安価な労働者像に親和的である。女性のハードワークと収入増加を「自立」の証として礼賛する表象は、自己責任論を追認するとともに、貧困の構造的背景を隠蔽する。

Cameron & Haanstra (2008) は、ポジティブな表象の一形態として、ハリウッドスターやアーティストを起用する広報戦略を分析している。そこでは、バンド・エイドが活躍した80年代のセレブリティ人道主義とは異なって、「飢えたアフリカの子ども」の写真に頼ることなく、著名人の体現するセックス・アピールが資金収集の要となる。セクシュアリティの商品化を通じて性差別的・異性愛主義的な消費欲を掻き立てるプロモーションは、「第一世界」の消費資本主義と「第三世界」の貧困を結びつける収奪構造を覆い隠す。

もちろん、上述したように広報の改善努力の背景には開発業界での真剣な議論があった。その議論は、「犠牲者」的表象が開発課題の構造的な理解を阻んできたことへの反省に根ざしたものであり、同時期に浮上した開発の新しい潮流とも軌を一にしていた。その潮流には、緊急人道支援にとどまらず長期的視野に立った住民主導のコミュニティ開発、ゆたかな社会の大量消費と「第三世界」の収奪的労働の結びつきに目を向ける開発教育、自国政府の貿易や外交に働きかけるアドボカシー活動などが含まれる。広報戦略の転換をプロモーション重視の打算の姿勢のみに帰することはできない。新しい開発理念を背景とした明るい「第三世界」イメージが、開発に関心をもつ市民の裾野を広げてきたのも事実だ。

しかし、一連の研究群が問題にしているのは、真摯な反省的議論を淵源とするにもかかわらず、関係者たちの意図に反して表象実践が主流の開発の論理と共振してしまう様相なのである。ネガティブ／ポジティブの区分にかかわらず、どんな表象も手つかずの「現実」や「真理」を写しとったものではないのであり、その意味作用は支配的な意味体系から完全に自由ではありえない(Lidchi 2015)。新しいコンセプトが次々

と開発アジェンダの内側に制度化されていった事態を別の角度から評価すれば、開発概念の「インフレ」(Esteva 訳書 1996, 26頁)が生じたという見方も成立しうる。ヴォルフガング・ザックスの表現にしたがえば、トルーマンの演説で姿を現した「開発」は、90年代までに異質な概念群を大量に摂取したことで、形状が曖昧な「アメーバ」のような言葉になった。「開発」はもはや実質的な意味を喪失して、あらゆる人びとが自身の理想を投影しうる空虚なカテゴリーとなった。にもかかわらず、介入を高次の目標の名の下に正当化する機能だけは失っていないのである(Sachs 訳書 1996, 14頁)。同様の観点からCornwall & Brock (2005)は、貧困削減戦略やミレニアム開発目標(MDGs)など開発関連文書の分析を通じて、「参加」「エンパワーメント」「貧困削減」といった概念が本来の反体制的性格を剥ぎとられ、耳触りの良い「流行語 buzzword」として組み込まれたと論じている。

開発概念が「アメーバ」状に勢力を拡大して、四方八方に触手を伸ばす現代の情勢下では、フェミニズムをはじめとする解放闘争もまた、発展段階論的思考様式による流用の危険にたえず晒されている。ポジティブな表象実践の意味作用も、こうした支配的力学から自由ではない。特に2000年代中盤以降、多国籍企業と世界銀行のイニシアチブを通じて、「女の子への投資」を前面に押し出した開発戦略が大規模に打ち出されると、グローバル資本主義によるフェミニズムの篡奪が顕著になっていく。

4. 「女の子への投資」：フェミニズムの資本主義的流用

周知のように1990年代は、ジェンダー平等の国際的潮流が目覚ましい発展を遂げた時代だった。女性に対する暴力撤廃宣言(1993年)、ウィーン世界人権会議(1993年)、北京世界女性会議(1995年)などを通じて、あらゆる開発政策やプログラムの計画・実施およびインパクト評価にジェンダー視点の導入を求める「ジェンダー主流化」の発想が定着していく。それと同時に、万人のための教育(EFA)やミレニアム開発目標といった行動枠組によって、女子教育の権利保障が国際社会の共通規範となる。

上村千賀子(2000)の整理によれば、開発分野における女性支援の歩みは、WID(Women in Development)、WAD(Women and Development)、GAD(Gender and Development)という3つのアプローチに大別される。70年代初頭に登場したWIDは、近代化論を背景とするリベラル・フェミニズムに基礎を置き、女性を開発過程に統合することを提唱した。70年代後半から80年代に台頭したWADは、WIDの西洋中心主義的性格に対抗して、貧困の要因を資本主義世界経済による収奪に求めた。エンパワーメント概念の源流のひとつとされる南アジアのフェミニスト・ネットワークDAWNもこの立場に共鳴し、各地の草の根女性たちが連携する気運を生みだした。90年代に浮上したGADは、関係論的カテゴリーとしてのジェンダーを分析視点にすえながら、参加型開発による意識変容と社会変革を提唱してジェンダー主流化論の基礎となった。しかしながら、Wilson(2015)が述べるように、主流の開発組織で一貫して優位を占めてきたのは近代化論を背景とするWIDアプローチだった。この潮流こそ、女性労働を貧困削減や経済成長といった至上価値のために道具化(instrumentalize)し、グローバルな収奪的資本蓄積によるフェミニズムの選別的流用(selective appropriation)を促進する根拠となったのである。

世界銀行のジェンダー・アクション・プラン(2007-10)に登場した「スマート・エコノミクスとしてのジェンダー平等 gender equality as smart economics」は、フェミニズムの資本主義的流用を象徴する標語だ。この路線は、80年代構造調整政策で猛威を振った効率性(efficiency)重視のWIDアプローチを継承している(Chant & Sweetman 2012)。世界銀行は、自らの破壊的な債務政策によって失業と雇用劣化が進行するなか、生存維持に奔走した女性のハードワークに目をつけた。Hendricks & Bachan(2015)が整理する

ように、1993年には世界銀行チーフ・エコノミストが「女子教育は発展途上世界への投資のなかでもっとも高い収益を生む分野だ」と発言し、同時期のレポートには、「女性中等教育就学率が倍増すれば一人あたり平均出生率が5.3から3.9に低下する」などの統計値が並んだ。なかでもドナー機関の関心を惹いたのは、女子教育への投資が経済成長をもたらすとするデータだった。「女子の教育年数を1年延ばすと賃金が10～20%上昇する」といった「エビデンス」が開発業界に浸透していく（Hendricks & Bachan 2015: 899-900）。スマート・エコノミクス論は、ジェンダー主流化やエンパワーメントといったフェミニズムの国際的潮流を察知しつつ、経済効率の価値体系にそれを組み込むことでWIDアプローチの復権を図った。もちろんそのロジックは、構造的不平等を棚上げにする点でフェミニズムの変革的理念とは異質であり、「フェミニストの顔をした新自由主義 neoliberalism with a feminist face」（Prügl 2017）と呼んでおくのがふさわしい。

こうした道具主義的なジェンダー観が大規模に波及する転機となったのが、ナイキ財団によって2008年に開始された「ガール・エフェクト」キャンペーンだった（Boyd 2016）。同財団のウェブサイトには、「女の子に投資しよう。あとは彼女が全部やってくれる」「ガール・エフェクト：名詞。6億人の思春期の女の子たちが固有にもっている、自分自身の貧困と世界の貧困に終止符を打つ潜在的な力のこと」といった文言が並んだ。さらに、商品プロモーションやSNS上のアピール、チャリティ・イベントなどを通じて、「第三世界」の少女たちへの支援を求める呼びかけが拡散されていった。こうしてガール・エフェクトは、大企業や国連機関・政府系開発機関の支持を受けて、グローバルな一大事業へと成長を遂げる。

同じ時期、2009年の世界経済フォーラムで思春期の少女を議題とする総会が開催されたことも大きな反響を呼んだ。若い少女たちの教育や収入向上プログラムに投資すると、出生率が低下して子どもの栄養状態が改善され、貧困の世代間連鎖が解消され、家族や地域共同体の貧困削減や国家の経済成長につながる、というシナリオが財界や政府代表やNGOの関係者を惹きつけた。女性のエンパワーメントを資本主義市場での人的資本形成に縮減し、ジェンダー平等を国家競争力向上の手段とみる世界経済フォーラムの性格は、ガール・エフェクトとも親和的だ（Elias 2013）。オフラ・コフマンとロザリンド・ギル（訳書 2021）は、多国籍企業や国連機関、国際NGOがタッグを組んで「第三世界」の少女のポテンシャルに過大な期待を背負わせる一連の動向を、WID・WAD・GADに続く第4局面として読み解き、「開発のガール・パワー化 girl-powering of development」と呼んだ。

では、「女の子への投資」を駆動させる開発組織の表象実践は、どんな人物像を呈示してきたのか。Switzer（2013）によれば、ガール・エフェクトのPR映像は、2つの異なるタイプの少女像を配置することで「第三世界」の少女たちのセクシュアリティに言説的規制を加える。児童婚を余儀なくされた少女（child-bride）は、行為能力（エージェンシー）の欠如態として記号化されており、夫や子どもは強制的に降りかかる重荷として描かれる。これに対して学校に通う少女（school-girl）は、自らの意思で勉学に励み、飢餓やHIVや妊娠の脅威を逃れて健康に暮らし、世界経済の危機を救う「解決策 solution」として理想化される。だが、Switzerの分析によると、真に行為能力を付与されるのは、実はいずれの少女像でもなく「第一世界」のオーディエンスである。PR映像は、虐げられた少女たちを放置するのか、それとも少女たちの可能性に投資して世界を前進させるヒロインに変身させるのか、という決断を迫る。この呼びかけを通じてオーディエンスは、善良な救世主（savior）としての主体位置を暗に付与される。

同じくガール・エフェクトのPR映像を分析したCalkin（2015）は、多国籍企業の利潤追求との密接な関係を読み解いている。ガール・エフェクトは、商品購入を通じてチャリティへの参加を促す。ナイキ製品の着用は「第三世界」の少女たちとの精神的紐帯の獲得に結びつけられる。だが、映像中の少女たちが辿る「解放」の道筋には一定の制約が加えられている。「エンパワー」された少女たちはいずれも、スモール・ビジ

ネスによる収入創出活動で生計を立てるのであり、労働集約的な大規模生産に従事することはない。一頭の牛を購入して家族を養うことはあっても、ナイキ社の現地工場に集団雇用されることはないのである。Calkinは、ここに多国籍企業の周知なブランド戦略をみる。ガール・エフェクトは、女性の経済的自立を称揚しながら、ナイキ社自身による児童労働への加担やそれに抗議する反グローバリゼーション運動の歴史を捨象する。それによって、安価な女性労働力を利潤の源泉としてプールしつつ、資本主義的開発が女性解放をもたらすかのように偽装するのである。

ブラン・インターナショナルUKのウェブサイト进行分析したMacDonald (2016) によれば、若い少女が投資対象とされる背景には異性愛主義的家族観がある。児童婚を一律に人権侵害として禁止する一方、一定年齢をこえて男性と結婚し、出産して母親になることは理想化されており、非婚の自由や婚姻制度の抑圧性を強調することはない。「女の子が教育を受けると、彼女たち自身だけではなく、その子どもやコミュニティも貧困から脱け出すことができます」といったフレーズは、女子教育の価値を家族や共同体の福祉向上に結びつける。「第三世界」の少女は将来性の標章 (emblems of futurity) として理想化されるが、そこには生産労働と再生産労働を一手に担う献身的な母親像が反映されているのである。

以上のように、「女の子への投資」を呼びかける表象実践は、ジェンダー平等やエンパワーメントに寄与するような見かけをとりつつ一層の負担を女性に要求する。男性は「利己的」で「無責任」、女性は「利他的」で「自己犠牲的」というステレオタイプが統計的な「エビデンス」と結合することで、この期待に正統性を付与する (Chant 2016, Cobbett 2014)。フェミニズムの解放理念は、前近代的な文化・伝統・慣習からの脱皮と同一視されており、個人主義的なリベラリズムへと矮小化されている。これにより、債務政策・租税回避・収奪的労務管理など、世界銀行や多国籍企業が自ら生み出してきた構造的暴力は隠蔽される (Hickel 2014)。同時に、オーディエンスは、投資や寄付を通じて貧しい少女たちを救援する主体として召喚される。ここには、人種化された「他者」を文明化するという植民地主義的観念の継続がみてとれる (Shain 2013)。その観念は、ムスリム女性に対する救済幻想に支えられた合州国の帝国主義的世界戦略とも符合する (Sensoy & Marshall 2010)。「開発のガール・パワー化」とも称される投資言説の肥大化は、フェミニズムを選別的に取り込みつつ、グローバル資本主義の推進力として転用していくのである。

5. 今後の研究課題：日本の国際協力組織による表象実践

以上のように、英語圏の批判的なメディア研究では、国際開発関連組織の広報活動を人種やジェンダーの視点から読解する分析が蓄積されてきた。開発理念の変容とグローバル資本主義の浸透に伴って、研究の着眼点も、「犠牲者」的表象からポジティブな表象へ、さらには「女の子への投資」言説へと深まりをみせていった。一方、日本の国際協力の文脈では、以下にみる一部の例外を除いて、具体的な素材をとりあげた研究は十分に蓄積されておらず、分析上の論点についても再考の余地がある。

紺野奈央 (2021) は、外務省の広報キャラクター「ODAマン」を題材に、国際協力に関する政府広報のあり方を議論している。紺野は、ODAマンを起用したコンテンツが楽しさとわかりやすさを優先するあまり、「途上国は困っていて、日本側には解決策がある」という一方向的なストーリー展開となり、「日本が経済や人材の面で普段から途上国に依存し、助けられているという側面を見えなくしてしまう可能性もある」と批判する (紺野 2021: 167)。ところが、論考の後半になると、ODAマンが「世界の奥深さ」を伝える「ヒーロー」として今後も「活躍」することへの期待を述べて、批判姿勢を大幅に後退させてしまう。ODAマンのコンテンツは、日本のインフラ建設・技術移転・人材育成の貢献をアピールするメッセージに満ちており、その

語り口は国益重視の大国ナショナリズムそのものだ。政府広報を論じるのであれば、ODAがアジア諸国からの収奪に加担してきた歴史を根底から批判する必要があるのではないか。

三宅隆史（2020）は、日本の国際協力NGO（96団体）のウェブサイトには描かれた途上国イメージの分析を通じて、大半のNGOが途上国の人びとを「希望を失った存在」ではなく「尊厳ある人間」として扱っていることを示した。この知見は、「犠牲者」的表象からポジティブな表象への変化が日本でも観察されることを裏づける点で示唆に富む。だが一方で、倫理的正当性の次元を重視するあまり、ポジティブな表象にも通底する政治的意味作用の問題を曖昧にしている。例えば三宅は、ステレオタイプを改善する取り組みとして、難民支援を呼びかけるセーブ・ザ・チルドレンの広報ツールを紹介する。「難民、亡命者 Refugees, Asylum seekers」という言葉が線で消去され、「親、子ども、家族 Parents. Children. Families.」という言葉が書き加えてある。その下の写真では、乳児を抱える母親が手前にクローズアップされ、背後に多数の難民が列をなしている。三宅はこれを「難民は難民である前に、親であり、子どもであり、家族である」ことを伝えるポジティブなイメージとして高く評価する。しかし、普遍的ヒューマニズムにもとづく人類の共通性の強調は、しばしばその背後に排除を忍ばせる。この広報ツールの場合、理想的受益者としての母子像を前景化したうえで、それと差異化される一群の人びと、例えば、標準家族の規範を逸脱する非異性愛者・非シスジェンダー当事者や、「テロリスト」予備軍とされるムスリム男性などを、フレームの周縁に配置する効果が生きている。イスラームフォビアと移民排斥が伸長する情勢の下で、「尊厳ある人間」の表象もまた人種やジェンダーの支配的意味体系と結合しうるのである。

北野収（2011）は、『国際開発ジャーナル』（1967年創刊）の表紙デザインの変遷を追跡した。分析によると、初期の頃は途上国の政治的指導者や技術研修参加者の男性、インフラ建設の場面などが多かったが、80年代半ばを境に、笑顔の若い女性や子どもなど「普通の人びと」の割合が高まった。北野は、親しみやすさを強調する写真が増えたことについて、「裏を返せば、それを見つめる私たち（とりわけ男性）側からのパターナリスティックな視線の対象物にはかならない、という構図を想定することも可能」だという（北野 2011: 69）。この指摘に本論も同意するが、女性や子どもの増加傾向はグローバル資本主義の趨勢に結びつけて考察する余地がある。例えば、JICA（国際協力機構）がSDGs達成のために掲げる「グローバル・アジェンダ」は、ジェンダー平等を「普遍的かつ根源的な価値」としながらも、「女性や女兒のエンパワメント（能力開花）を推進し、平等で公正な社会システムを構築していく取組は、経済的な合理性があり、貧困削減と経済成長を大きく促進する有効な開発手段でもある」としている¹⁾。フェミニズムの資本主義的流用の問題は、日本の国際協力とも無縁ではないのである。

このように、日本の国際協力の文脈でも、「第三世界」表象を論じた研究が、少ないながら一定の蓄積をみている。だが、英語圏の批判的研究に比較すると、開発援助体制による収奪の歴史、ポジティブな表象にも通底する政治的意味作用、そしてグローバル資本主義によるフェミニズムの流用といった重要な論点を看過しているという課題がある。この点を深めるひとつの試みとして、拙稿（2024）では、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンのインターネット広告を事例に、「女の子への投資」言説の意味作用を分析する作業を通じて、ポストフェミニズムの時代状況と植民地主義的發展段階論が相互に結託するありようを論じた。本論冒頭でもみたように、21世紀のフェミニズムは、資本主義的開発を女性解放と同一視する神話と手を切り、反資本主義の発想にもとづくトランスナショナルな連帯を生成する必要がある（Mohanty 訳書 2012）。こうしたラディカルな展望の下、日本でも今後、略奪的なグローバル資本主義をめぐる広範な合意形成の過程をジェンダーの視点から明らかにするメディア研究の展開が期待される。

注

- 1) 「JICAグローバル・アジェンダ：開発途上国の課題に取り組む 20 の事業戦略」
(<https://www.jica.go.jp/activities/issues/gender/index.html> 2024年 5月31日取得)

引用文献

- Boyd, G. G. D. 2016 "The Girl Effect: A Neoliberal Instrumentalization of Gender Equality." *Consilience*, 15, 146-180.
- Burman, E. 1995 "Developing Differences: Gender, Childhood and Economic Development." *Children & Society*, 9(3), 121-141.
- Calkin, S. 2015 "Post-Feminist Spectatorship and the Girl Effect: "Go Ahead, Really Imagine Her"". *Third World Quarterly*, 36(4), 654-669.
- Cameron, J. & Haanstra, A. 2008 "Development Made Sexy: How It Happened and What It Means." *Third World Quarterly*, 29(8), 1475-1489.
- Chant, S., & Sweetman, C. 2012 "Fixing Women or Fixing the World?: 'Smart Economics', Efficiency Approaches, and Gender Equality in Development." *Gender & Development*, 20(3), 517-529.
- Chant, S. 2016 "Women, Girls and World Poverty: Empowerment, Equality or Essentialism?" *International Development Planning Review*, 38(1), 1-24.
- Cobbett, M. 2014 "Beyond 'Victims' and 'Heroines': Constructing 'Girlhood' in International Development." *Progress in Development Studies*, 14(4), 309-320.
- Cornwall, A., & Brock, K. 2005 "What Do Buzzwords Do for Development Policy?: A Critical Look at 'Participation', 'Empowerment' and 'Poverty Reduction.'" *Third World Quarterly*, 26(7), 1043-1060.
- Dalla Costa M. & Dalla Costa G. F. eds. 1993, 伊田久美子監訳『約束された発展?』インパクト出版 1995.
- Dogra, N. 2007 "Reading NGOs Visually: Implications of Visual Images for NGO Management." *Journal of International Development*, 19(2), 161-171.
- Dogra, N. 2011 "The Mixed Metaphor of 'Third World Woman': Gendered Representations by International Development NGOs." *Third World Quarterly*, 32(2), 333-348.
- Elias, J. 2013 "Davos Woman to the Rescue of Global Capitalism: Postfeminist Politics and Competitiveness Promotion at the World Economic Forum." *International Political Sociology*, 7(2), 152-169.
- Esteva, G. 1992, 三浦清隆他訳『脱「開発」の時代』晶文社 1996, 17-41頁.
- Hendricks, S. & Bachan, K. 2015 "Because I am a Girl: The Emergence of Girls in Development." R. Baksh & W. Harcourt eds. *The Oxford Handbook of Transnational Feminist Movements*, Oxford University Press, 896-917.
- Hickel, J. 2014 "The 'Girl Effect': Liberalism, Empowerment and the Contradictions of Development." *Third World Quarterly*, 35(8), 1355-1373.
- Johnson, H. L. 2011 "Click to Donate: Visual Images, Constructing Victims and Imagining the Female Refugee." *Third World Quarterly*, 32(6), 1015-1037.
- 加藤剛 2017「グローバル支援の歴史的位置づけ：「開発援助」の生成と変容」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学：変貌するNGO・市民活動の現場から』昭和堂, 17-60頁.
- 北野収 2017『国際協力の誕生：開発の脱政治化を超えて』創成社新書.
- Koffman, O., & Gill, R. 2013 "'The Revolution Will Be Led by a 12-year-old Girl': Girl Power and Global Biopolitics." *Feminist Review*, 105(1), 83-102. (=近藤凜太郎訳「『12歳の女の子による革命』：ガール・エフェクト言説とグローバルな生政治」『大阪大学教育学年報』26, 87-106頁, 2021)
- 近藤凜太郎 2024「国際協力NGOのウェブ広告にみるジェンダー表象：ポストフェミニズムと結託する植民地主義」『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』27, 59-73頁.
- 紺野奈央 2021「ODAマンとは何者か：外務省のODA広報と想像力」松本悟・佐藤仁編『国際協力と想像力：イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社, 145-175頁.
- Lamers, M. 2005 "Representing Poverty, Impoverishing Representation?: A Discursive Analysis of a NGOs Fundraising Posters." *Graduate Journal of Social Science*, 2(1), 37-74.
- Lidchi, H. 2015 "Finding the Right Image: British Development NGOs and the Regulation of Imagery." H.

- Fehrenbach, & D. Rodogno, eds., Humanitarian Photography: A History, Cambridge University Press, 275-296.
- MacDonald, K. 2016 "Calls for Educating Girls in the Third World: Futurity, Girls and the 'Third World Woman'". Gender, Place & Culture, 23(1), 1-17.
- Manzo, K. 2008 "Imaging Humanitarianism: NGO Identity and the Iconography of Childhood." Antipode, 40(4), 632-657.
- 松井やより 1996 『女たちがつくるアジア』 岩波新書.
- 三宅隆史 2020 「国際協力NGOによる広報活動ならびにボランティア活動に関する一考察」『ボランティア学研究』 20, 69-80頁.
- Mohanty, C. T. 2003 堀田碧監訳 『境界なきフェミニズム』 法政大学出版局 2012.
- Müller, T. R. 2013 "The Long Shadow of Band Aid Humanitarianism: Revisiting the Dynamics between Famine and Celebrity." Third World Quarterly, 34(3), 470-484.
- Plewes, B. & Stuart, R. 2007 "The Pornography of Poverty: A Cautionary Fundraising Tale." Bell, D. & Coicaud, J. eds. Ethics in Action: The Ethical Challenges of International Human Rights, Cambridge University Press, 23-37.
- Pruce, J. 2016 "What Does Human Rights Look Like?: The Visual Culture of Aid, Advocacy, and Activism." M. Monshipouri eds. Information Politics, Protests, and Human Rights in the Digital Age, Cambridge University Press. 50-72.
- Prügl, E. 2017 "Neoliberalism with a Feminist Face: Crafting a New Hegemony at the World Bank." Feminist Economics, 23(1), 30-53.
- Rist, G. 1997 The History of Development: From Western Origins to Global Faith, Zed Books.
- Sachs, W. 1992 三浦清隆他訳 『はじめに』『脱「開発」の時代』 晶文社, 1996, 9-16頁.
- Said, E. 1978 今沢紀子訳 『オリエンタリズム』 平凡社 1986.
- 佐藤寛 2005 『開発援助の社会学』 世界思想社.
- Sensoy, Ö., & Marshall, E. 2010 "Missionary Girl Power: Saving the 'Third World' One Girl at a Time." Gender and Education, 22(3), 295-311.
- Shain, F. 2013 "'The Girl Effect': Exploring Narratives of Gendered Impacts and Opportunities in Neoliberal Development." Sociological Research Online, 18(2), 181-191.
- 塩沢美代子 1986 『アジアの民衆vs.日本の企業』 岩波ブックレット.
- Shiva, V. 1988 熊崎実訳 『生きる歓び: イデオロギーとしての近代科学批判』 築地書館 1994.
- Smith, M., & Yanacopulos, H. 2004 "The Public Faces of Development: An Introduction." Journal of International Development, 16(5), 657-664.
- Sontag, S. 2003 北條文緒訳 『他者の苦痛へのまなざし』 みすず書房 2003.
- Switzer, H. 2013 "(Post) Feminist Development Fables: The Girl Effect and the Production of Sexual Subjects." Feminist Theory, 14(3), 345-360.
- 上村千賀子 2000 「『ジェンダーと開発』のグローバリゼーション: 女性たちのエンパワーメント」『教育社会学研究』 66, 67-78頁.
- Wilson, K. 2011 "'Race', Gender and Neoliberalism: Changing Visual Representations in Development." Third World Quarterly, 32(2), 315-331.
- Wilson, K. 2015 "Towards a Radical Re-appropriation: Gender, Development and Neoliberal Feminism." Development and Change, 46(4), 803-832.
- Zarzycka, M. 2016 "Save the Child: Photographed Faces and Affective Transactions in NGO Child Sponsoring Programs." European Journal of Women's Studies, 23(1), 28-42.

Trends in Critical Media Studies on Gendered Representations of the “Third World” Produced by International Development Actors – Toward an Anti-Capitalist Transnational Feminist Solidarity –

KONDO Rintaro

This paper reviews critical media studies scholarship on racialized and gendered representations of the “Third World” produced by various actors involved in international development, such as United Nations agencies, multilateral institutions, government agencies, private foundations and corporations, and non-governmental organizations, to present a new research agenda for Japanese international cooperation.

Fundraising and advocacy materials depicting people in the “Third World,” which are widely circulating in the form of commercial advertisements, promotion videos, internet websites, and research reports, play a crucial role in connecting aid recipients in the global south with citizens in the global north. However, these representations often reinforce stereotypes concerning race and sex, rendering the exploitative structure of the capitalist world economy invisible. Taking account of current trends in international development agendas and the hegemony of neoliberal global capitalism, scholars in critical media studies have expanded the scope of analysis, from “negative” representations of victimized women and children to “positive” representations of empowered and self-reliant women and girls, and to promotional strategies calling for “investment in girls”. However, with a few exceptions, no analytical studies on specific materials have been conducted in Japan. To build an anti-capitalist transnational feminist solidarity, we hope to observe the development of media research that critically examines racialized and gendered representations of the “Third World.”